

2021年度 同朋大学 社会福祉学部

学校推薦型選抜(公募) 小論文 問題用紙

日本の小中学校は、国籍や在留資格の有無にかかわらず、外国人の子どもに対しても就学の機会を与えている。外国人登録をしている場合は、地域の教育委員会から、学齢期の子どもを持つ親には就学案内を発送し、外国人登録がない場合は、親から個別に要請があれば就学を認めている。だが、日本人にとっては権利であると同時に親の義務である教育も、外国人の親にとって、義務ではない。

就学の機会が与えられている、とはいっても、一四歳や一五歳など日本人なら義務教育の終わりにさしかかる年齢の子どもの場合は、なんととはなしにめんどうくさがれているし、就学をするにしても、外国人の側の事情を考慮したかたちが保障されているわけではない。たとえば、来日直後の子どもであっても、多少の調整はあっても、十歳なら小学校四年生、十二歳なら小学校六年生、という具合に学力に関係なく、年齢に相当する学年に編入させている。

そして、「義務」ではないという理由で、いったん子どもが学校に通わなくなれば、親が子どもをむりやり学校まで引きずっていくのでもなければ、ごく一部の熱心な教師が個別に子どもにはたらかかけているほかは、そのまま放っておかれるケースがほとんどである。

マリアがペルー人の両親とともに日本に来たのは十二歳のとき。さっそく地元の小学校に入学したが、彼女の母親は不安だった。マリアは日本に来たばかりで、日本語ができない。せめて小学校低学年から勉強を教えてほしいのに、なんで六年生に編入するの？ 私の国では、勉強についていけなかったり、家の都合で学校に行けない子どもたちは、何年もかけて小学校を卒業する。授業が理解できないまま学校に行っても、ぜんぜん意味がないのに。

母の不安はあたった。一年後、用事があって家に電話をしたら、昼間だというのにマリアが電話に出る。マリアに中学校はどうしたのか、と聞くと、入学したけどすぐにやめ、今はアルバイトをしているという。中学校にあがったら勉強がさっぱりわからなくなったので、学校が楽しくない。同じ中学校にふたりいたペルー人の友だちはひとあしききに学校をやめ、アルバイトでお金を稼いでいる。ふたりが携帯電話を自由にかけているのがうらやましくなった、という。

なぜ、外国人の子どもたちは学力が低いのか。なぜ子どもたちは学校に行かなくなるのか。親の人生設計が、子どもたちの気持ちに影響を与えているケースが目につく。多くの親は、日本にお金を稼ぎに来ている。日本人としてはさびしい話だが、日本に暮らす外国人のなかの相当部分は、それなりの年月を日本で過ごしてもなお、いつかは本国に帰りたいと思っている。職場で昇進の機会がなく、生活すべてが息がつまるほど細かく管理されている日本に定住する意思はとぼしく、お金をためたら、家を買うか、国に帰って商売でもしたいと思っている人がほとんどである。だが、意識としてはそのつもりであっても、結局計画どおりにお金がたまらず、帰国しても仕事もないし、とずるずるとなし崩し的に滞在が長引くケースが多い。その場合、子どもは親の宙ぶらりんの態度につき合わせるをえないし、そもそも自分の意思とは関係なしに日本に連れてこられた子どもたちは、いつか故郷に錦を飾る、という親の夢を共有できない。

外国人の子どもは、来日した当初は日本語がまったくわからないので、学校ではまず「おはようございます、私は〇〇です」といった初歩的な日常会話からスタートする。一、二年経って、ある程度の普通の会話ができるようになると、その後は、ほかの日本人の子どもた

ちと同じクラスで、普通に教科の勉強もさせられる。しかしながら、その間、学習内容は日本人の子どもたちに大きく水をあけられているし「学習思考言語」が身につけているわけではないので、授業の内容がさっぱりわからない。にもかかわらず、日本語は普通に話せるじゃないか、成績が悪いのはおまえの勉強が足りないからだろう、と特にフォローもないまま放っておかれる。カミンズが研究の対象にしたのはカナダにおける移民の子どもだが、日本の場合は、「学習思考言語」はほとんどが漢字の組み合わせで表現されるのだから、子どもの負担ははるかに大きいはずだ。

さらに、一日の大半を過ごす学校では、母語への配慮はないので、家庭で両親がしっかりと教えない限り、日本語を学ぶにつれて、母語の能力もどんどんさがる。

外国人の子どもは、多様な価値観を認めようとしめない日本の社会を変える可能性を秘めている。筆者は、これまで、ブリティッシュ・ロックのバンドに参加しながらも「自分はカトリックだから『ファック』とか歌うのは嫌だ」というペルー人の男の子の話をきいてなるほど、と思ったことがあるし、外国人の子どもたちが、学校で自国のお祭りや文化を発表することによって、クラスメートに感銘を与えた様子も目になっている。違う文化から来たクラスメートと机を並べて学校生活を送ることで、日本人の子どもたちが得るものはけっして小さくないはずだ。

また、外国人の子どもが日本にいる、ということは、彼らの出身国にとっては、働き盛りの世代と将来の発展を支える人材がいない、ということを意味する。これは多くの場合、地域社会の結びつきを破壊し、地元の産業構造を送金に頼った消費中心の、資本蓄積に不利なものにしている。これは本国の、出稼ぎを送り出している家庭や、彼らの町で過ごせばすぐわかる。移民や出稼ぎを、経済的・社会的条件に規定されつつ個人が選択した自発的な行動にとらえたとしても、日本の社会は、勤勉な外国人を安価な労働力として利用し、「国の宝」である子どもたちを預かっている以上、外国人の子どもを、日本の社会で尊厳ある人生を送ることができるようにするのは、もちろん、日本と本国の交流を進め、本国の発展を助ける人材に育てる責任があるはずだ。

しかしながら、子どもたちのことばと文化にスクラップ・アンド・ビルドをほどこして、勉強についていけない子どもたちを放置するだけでは、結局のところ日本語の中途はんばな日本人もどきを作ることにならないだろうか。

日本語でも母語でも簡単な手紙ひとつ書けない子どもたちは、将来、社会に出て、いったいどんな仕事ができるのだろうか。現状では、子どもたちがその可能性を開花させるどころか、社会の底辺におかれ、非行に走る危険が否定できないし、それが日本人側の外国人に対する差別や反感をおおるおそれもある。

(ななころびやおき(2005)『ブエノス・ディアス、ニッポン
〜外国人が生きる「もうひとつの日本」〜』による)

問1 右の文を読み、200字程度で要約せよ。

問2 外国人の子どもが、多様な価値観を認めようとしめない日本の社会を変えていく一助になるために、どのようなことが必要だと思うか。あなたの考えを600字以内で述べよ。